

II-2-1

明治前期の博覧会と「水産図解」

島根大学・機構共同研究者
伊藤 康宏

はじめに

東京都大田区立郷土博物館が1995年6月に特別展「明治時代の水産絵図」を開催した。これは、「本書で紹介する『水産絵図』は、水産振興を切望した時代の産物です。改めて『水産絵図』を見直すことで、水産業をめぐる環境が様変わりした現代を見つめる」といった趣旨で企画されたものである。そこで展示された資料は明治の博覧会（内国勸業博覧会と水産博覧会）などに全国から出品された223点に及んだ。このような特別展が何故、この時期、地域博物館で開催されたのであろうか。そこに興味を持たれるが、それは同館の関係者の熱意、関心がとりわけ高かったことは想像するに難くないが、それとともに90年代前半までに関連資料が少なからず復刻されたことによるものと見られる（1.『新編 魔海魚譜』1979年刊、2.『福岡県漁業誌』1982年刊、3.『三重県水産図解』1984年刊、4.『五島列島漁業図解』1992年刊、詳細は本論で検討）。しかしながらこの特別展以降、この方面に関心がさらに高まることが予想されたが、管見の限りでは残念ながらそれに続く動き、研究は深化しないまま今日に至っている。

ところで本研究は、2008年春、東京神田の古書店目録に「(題箋) 出雲石見魚漁図解 巻、式、参、四」4冊と「(題箋) 因伯魚漁図解 上下」2冊がはじめて世に出、島根大学附属図書館が貴重な郷土資料としていち早く本資料を購入し、デジタルアーカイブ化したことを契機としている。本資料は作成者や作成年さらに作成の意図などについて基本情報がないためまったく不明でかつ朱書き等の訂正が随所に見られる点を特徴とした。しかしながら東京国立博物館所蔵の「島根県下 漁具図説」（第2回内国勸業博覧会に島根県勸業課が出品した「島根県管内漁具類集図」の複写本）と比較検討すると、内容構成と収録漁業がほぼ一致することなどから「島根県管内漁具類集図」の草稿本と推定される。

本研究の課題は明治前期の博覧会と「水産図解」の歴史的特質ならびに研究の意義と展望について論じることであるが、1. 明治前期の漁業概況と水産博覧会、2. 明治前期の博覧会への出品物「水産図解」、3. 「水産図解」の刊行状況と山陰の「漁業図解」、4. むすびにかえて一研究課題と関連させて一構成でみていきたい。

1 明治前期の漁業概況と水産博覧会

(1) 明治前期の漁業概況

近代日本漁業史において漁業の資本主義化、近代化（動力化）に関する研究がこれまで中心に進められてきた。これに対して明治前期の漁業に関する研究成果は必ずしも多くない。ここでは

その中でもこの分野の代表的な概説書である二野瓶徳夫著『日本漁業近代史』（平凡社、1999年）「第二章 近代的漁業技術の模索」からこの時期の漁業を概観しておきたい。

「漁業は洋々たる希望と前途をもって明治維新を迎えたわけではなく、総体としてみれば、全国の漁業生産量は停滞状況に入りつつあった。もちろんすべての漁業生産が停滞状況に入ったわけではない。狭い沿岸漁場に極限されるか、そうでなくても非能率な漁業技術による生産は衰退の方向をたどり、それを克服して漁場領域の拡大と能率化に向かっていた漁業技術による生産は発展しつつあった。この二つが交錯しつつ漁業生産の停滞は明治末期まで続くのだが、それは高能率な近代的な漁業技術が容易に開発できなかったこと、そして明治期全体として近代的漁業技術模索の時代であったことを物語っている。」（同書58頁）としている。そして衰退する漁業として地曳網漁業と大敷網・大謀網漁業といった大規模な沿岸漁業を例示し、また発展しつつある沖合漁業として改良揚繰網漁業、米国式巾着網漁業、打瀬網漁業などについてそれぞれの特徴を解説している。ただし、当時は未だ統計が取られていないので、量的な把握はできていない。¹ 一方、近年の水産資源学の研究成果ではこの時期、水産資源、特にイワシ資源の後退局面が指摘されている。その要因を考慮すれば、漁業生産の停滞は単に漁業技術の非能率性のみが原因では無かったと言える。² ともあれこのような漁業状況に対して明治政府は、「研究、普及、指導こそが、漁業振興をめぐる政府の基本姿勢で（中略）明治一四年に農商務省が新設され、農務局のなかに水産課が置かれ、水産課が行った最大の事業は、水産博覧会の開催であった。（中略）博覧会の目的は、在来の優良技術の開発・普及、すなわち漁業技術発達の地域差の実態を把握し、先進地域の優良技術を広く掘り起こし、それを他地域に普及させることにあった。」（同書101頁）としている。

（2）水産博覧会

つぎにこの時期の水産振興策であった水産博覧会を取り上げるが、これについてははじめて本格的に取り上げた関根 仁「明治一六年水産博覧会の開催」（『日本歴史』第671号、2004年4月）からその概要を見ておきたい。

1883年（明治16）開催の水産博覧会は特定のテーマに限定した国内で唯一の博覧会であったが、この背景はつぎの理由とされている。すなわち水産物は「富国ノ一大利源」であるにもかかわらず未活用の状態で、漁業の勧奨や保護の方法が整備されていないといった漁業政策の遅れを水産施策の担当者が認識していた。そして政府による漁業の保護・奨励を急務とし、その手立てとして水産博覧会が最も有効であるとし、それを漁業振興の「第一着手」と位置づけた。その過程は1880年のベルリン漁業博覧会への政府参加、1881年の太政官に水産博覧会の開催提案、1882年の開催予算の確保（大蔵省案の予算削減）、同年の博覧会事務体制の整備と事務所の設置、そして1883年3月の博覧会開催に至ったのである。

つぎに開催決定後の府県の対応は様々で、ここでは東京府を事例に検討している。体制は水産博覧会委員3名、実務の中心となった世話掛6名（当初16名案に対して東京府会で議論され、水産博覧会無用論も出されたが、最終的には予算が大幅に削減）、小使の構成が取られた。水産博覧会への出品状況は、出品総数15,267点（島根県から227点の出品、以下カッコ内同じ）、出品区分として第1区漁業6,102点（68点）、第2区製造8,443点（96点）、第3区養殖220点（4点）、第4区図書類他452点（3点）であった。この第4区図書類他は、本資料の「出雲石見魚漁図解」に関係す

る分野で「各地から水産誌・図説が出品されており、漁具等の出品とともに漁業関連の編纂物が重視されるようになった。水産博開催が、その後、各地での水産誌編纂の契機となったことは注目される。」としている。ただ、受賞した出品物は、優良ではあるが、山口県から出品された遠洋漁船を除いて、遠洋漁業への萌芽、将来性に乏しいといった特徴を有していた。ともあれ水産博覧会は漁業の産業技術の現状と最新技術の紹介、啓蒙する場といった機能を体現していたとしている。そして水産博覧会の効果－漁業振興と勸業諸会－では幹事の田中芳男は「予想外の出品」数と「各府県の協力で満足」を示し、そして水産博覧会の効果の一つが各府県・民間レベルで勸業政策として共進会・集談会が開催され、継承されていったとしている。

2 明治前期の博覧会への出品物「水産図解」

第2回内国勸業博覧会は1881年（明治14）に開催されたが、水産・漁業は第5区「農業の部」の一分野に位置づけられた。この博覧会に水産図書として勸農・博物の2局・2点と島根県等7県・7点それに神奈川県からは個人1点、合計10点が出品された（表1参照）。これら「島根県管内漁具類集図」³をはじめ、詳細については不明である。なお、水産図書の名称は、「図説」「図解」「(集)図」といった用語が末尾に付されていた。ここでは漁業（漁具・漁法）もしくは水産（漁業と水産物）に関して図示と解説を行っている資料として前者を「漁業図解」、後者を「水産図解」の用語に統一したい。

表1 第2回内国勸業博覧会出品「水産図解」

	出品者	点数	出品名
1	勸農局	1	「養魚一覽図」
2	博物局	1	「漁獵図説」
3	群馬県	1	「人工養魚ノ方案」
4	石川県	1	「漁具図」
5	三重県	1	「図解漁具図採藻貝図」
6	島根県	1	「島根県管内漁具類集図」*3
7	高知県	1	「捕鯨場図」
8	福岡県	1	「福岡県漁業図解」
9	大分県	1	「漁具類集真写図」
10	神奈川県（個人）	1	「養魚場図」

「勸業博覧会資料」165、167、168、170、173（『明治前期産業発達史資料』明治文献資料刊行会、1975年）

第1回水産博覧会は、第2回内国勸業博覧会の翌々年に開催されたが、第4区「水産図書」類には勸農局はじめ、30府県庁と2村、3個人、1会社から「水産図解」合計64点が出品された。このうち受賞は、3等賞（最高賞）が2点（個人1点、鹿児島県1点）、4等賞が8府県（東京府、静岡県、岐阜県、三重県、兵庫県、島根県、愛媛県、福岡県）・8点、褒賞は9点、その内訳は6県（根室県、札幌県、千葉県、神奈川県、新潟県、滋賀県）・6点、村1点、個人1点、有志1点、計19点であった。⁴ 以下は「水産博覧会審査評語」第4区1類の上位入賞（3等、4等）と講評を掲載しておく。

表2 第1水産博覧会3等賞の受賞者（機関）と「水産図解」

出品者出品名	出品名
東京府川井（個人）	「魚類写生図」「漁業図並解説」「統計表」
鹿児島県勸業課	「漁撈説略」「板屋蚶録」「甕海魚譜」「松魚殖道図」「管内水産統計表」他

【水産博覧会審査評語第四部】（明治16年）

東京府川井（個人）「魚類写生図漁業図並解説（統計表）」の講評は「日本橋ノ魚市ニ上ル各種ノ魚類及ヒ之ヲ漁スルノ状況悉ク其真ヲ写ス」と。

鹿児島県勸業課「漁撈説略」「板屋蚶録」「甕海魚譜」「松魚殖道図」「管内水産統計表」他の講評は「六種各優劣アリト雖トモ漁業ノ規程漁撈ノ方法等ヲ編纂シテ管下水産ノ状況ヲ示シ殊ニ魚譜ノ如キハ之ヲ刊行シテ世ニ公ニス用意ノ厚キ洵ニ嘉賞スヘシ」と。なお、鹿児島県勸業課3等属・白野夏雲はこの功労者として3等賞を受賞している。

表3 第1回水産博覧会4等賞の受賞府県と作品

出品者	出品物
東京府勸業課	「捕魚採藻図録」「水産物売買統計表」
静岡県勸業課	「水産物写生図」「漁業及産額概算一覧表」
岐阜県勸業課	「諸川形状図」「魚介図」「漁業図」「統計表」
三重県勸業課	「三重県水産図解並図書」「管内水産統計表」
兵庫県勸業課	「漁業図解」「水産統計表各種」
島根県勸業課	「水産要録」「漁具図解」
愛媛県勸業課	「漁業実況図」「漁具図」「塩田図」
福岡県勸業課	「漁業誌」

【水産博覧会審査評語第四部】（明治16年）

東京府勸業課「捕魚採藻図録」他の講評は、「捕魚採藻ニ関スル事項ヲ調査シ図説一篇ヲ作テ能ク其要ヲ悉ス殊ニ統計表ヲ以テ府下水産物ノ商況ヲ明ニスル等用意懇到ナリ頗ル嘉賞スヘシ」と。

静岡県勸業課「水産物写生図」他の講評は、「写生ノ図管内ノ所産ヲ網羅シテ能ク其名名称形状ヲ正シ且ツ一覧表ヲ以テ漁況ノ要領ヲ示ス共ニ其宜キニ適フ注意ノ厚キ頗ル嘉賞スヘシ」と。

岐阜県勸業課「漁業図」他の講評は、「三図各解説ヲ付シテ能ク事実ヲ詳ニス統計表ノ如キハ作為未タ宜キニ適セスト雖トモ彼此須テ濃飛二国ノ漁況ヲ示スニ足ル用意ノ周到ナル頗ル嘉賞スヘシ」と。

三重県勸業課「三重県水産図解並図書」他の講評は「記事懇到ニシテ図書亦其实ヲ得タリ統計表ノ如キハ作為未タ完全ナラスト雖トモ管下ノ漁況網羅シテ余蘊ナシ用意ノ厚キ頗ル嘉賞スヘシ」と。

兵庫県勸業課「漁業図解」他の講評は、「河海捕漁ノ方法ヲ調査シ作ル所ノ図解其实ヲ失ハス殊ニ統計表ノ如キハ往々細瑕ナキニアラスト雖トモ亦以テ参考ノ資トナスニ足ル用意ノ懇到ナル頗ル嘉賞スヘシ」と。

島根県勸業課「水産要録、漁具図解」の講評は、「管下漁業ニ関スル諸般ノ事項ヲ調整シ以テ之ヲ図書ニ上セ能ク其要尽ス用意ノ厚キ頗ル嘉賞スヘシ」と。

愛媛県勸業課「漁業実況図、漁具図」他の講評は、「管内沿海ノ形状ヲ描キ漁況ヲ指示スル能ク要領ヲ得タリ漁具及塩田ノ図亦其詳細ヲ尽ス用意ノ厚キ頗ル嘉賞スヘシ」と。

福岡県勸業課「漁業誌」の講評は、「調査周密ニシテ記事明瞭ナリ之ニ副ルニ魚介ノ図竝ニ漁具ノ雛形等ヲ以テス用意懇到ナル頗ル嘉賞スヘシ」と。

3 「水産図解」の復刻刊行状況と山陰の「漁業図解」

(1) 「水産図解」の復刻刊行状況

1) 「甕海魚譜」は島津出版会編『新編 甕海魚譜』（島津出版会、1979年、230頁）、『甕海魚譜復刻版』（書肆侃侃房、2006年）の形で復刻。原編者・白野夏雲（鹿児島県3等属）、鹿児島県勸業課、第1回水産博覧会出品、魚類誌。

2) 「福岡県漁業誌」は西日本文化協会編『福岡県史 近代史料編 農務誌 漁業誌 附録 絵馬』（福岡県、1982年）に収録、福岡県文化会館本を復刻、このほか東京国立博物館本、国文学研究資料館所蔵祭魚洞文庫筆写本等あり、内容は第1回水産博覧会出品、全5冊、第1、2は筑前、第3は豊前、第4は筑後、附録魚貝類の解説・図譜、彩色なし。またこれより先に『福岡県漁業誌』第1篇－第5篇、附録（福岡県、1978年）他で復刻。

3) 「三重県水産図解」は東海水産科学協会・海の博物館編・出版『三重県水産図解』（1984年）で復刻、内容は第1回水産博覧会出品、1883年3月に編著者早田(委員)の序、一等出仕桜井金次郎の絵図、全5巻5冊（1巻7魚種、2巻11魚種、3巻5魚種他、4巻5魚種、5巻10魚種毎に漁法の図解、漁村維持法）で構成、また、第2回内国勸業博覧会出品の「三重県水産図説」は同じ東海水産科学協会・海の博物館編・出版『三重県水産図説』（1985年）の形で復刻。

4) 長崎県「漁業誌料図解（南松浦郡）」（表紙裏に「明治十五年水産博覧会エ出品図解之控」と記載）は立平進編『五島列島漁業図解 明治十五年作成』（長崎県漁業史研究会、1992年）として復刻、長崎県立美術博物館所蔵資料登録名：『漁業誌料図解』、全編18種の漁業と71の絵図で構成。ただし、同資料は第1回「水産博覧会審査評語」には見当たらない。

5) 根室県勸業課「漁獵採藻略説」、稿本 54丁、1882年、「根室県」罫紙、根室、釧路、北見、千島諸島の魚類、海獣および海産物とその収穫状況の解説。第1回水産博覧会出品の下書きとみられる。なお、北海道大学北方資料室が画像公開している。

<http://ambitious.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/kyuki/doc/0A015840000000.html>

6) 「兵庫県漁具図解」は第2回水産博覧会出品（1897年）であるが、関西学院大学図書館が画像公開している。<http://library.kwansei.ac.jp/e-lib/gyogu/gyogu.html> 同資料は大日本水産会兵庫支会編集・刊行で、兵庫県下の地域（摂津・播磨・淡路・但馬）ごとの魚名、漁期、漁具の構造、漁具の新調費、使用法などの解説と漁具の構造図・使用図などを報告している。

(2) 山陰の「漁業図解」－「島根県下 漁具図説」と「出雲石見魚漁図解」「因伯魚漁図解」

「島根県下 漁具図説」は1881年の第2回内国勸業博覧会に島根県勸業課が出品した「島根県管内漁具類集図」の写しとして博覧会事務局が作成、絵図は中島仰山。鳥取側を含む島根県域を対象とし、全体で図172点、解168点が収録されている。地域別では図172点のうち島根側112点、鳥取側60点、解168点のうち島根側110点、鳥取側58点が収録されている。海面の網漁業、大敷網漁業から始まり、釣り・縄漁業、そして内水面・河川の釣り、網漁業、そして雑漁業の構成で

収録されているが、必ずしも体系的な内容にはなっていない。

一方、島根大学附属図書館所蔵の「出雲石見魚漁図解」と「因伯魚漁図解」ははしがきが欠けているので、作成の経緯等について不明である。しかし「島根県下 漁具図説」とほぼ同一の内容構成（漁業図、「器名」「器具ノ製」「使用法」「地名及地形」「季節」「漁獲名称」）であるが、全体に渡って朱書・後筆の訂正箇所が各所で見られる点等から「島根県下 漁具図説」の正本、「島根県管内漁具類集図」の草稿本と推定される。内容は「出雲石見魚漁図解」全4巻に収録された漁業が図解105点（延べ106点）であった。各巻では巻1は図27点、解26点（図「大敷浮物之図」欠）、巻2は図解ともに25点（一致）、巻3は図23点（解「釣・庭繩」欠）、解24点、巻4は図解とも30点（一致）がそれぞれ収録されている。漁具使用の水域では海面が64点、うち網漁業24点、釣雑漁業40点、内水面（河川・神西湖）25点、宍道湖9点、中海8点であった。巻別では巻1が図27点、うち海面使用の網22点、中海5点、巻2が図25点、うち河川17点、宍道湖7点、中海1点、巻3が解24点、うち海面の釣21点、河川1点、宍道湖1点、中海1点、巻4が図解30点、うち海面の雑漁具19点、河川9点、宍道湖1点、中海1点であった。このことから巻1は海面使用の網漁業が、巻2は河川と宍道湖の漁業が、巻3は海面の釣漁業が、巻4は海面の雑漁具が、それぞれ中心に構成されていた。これに対して「因伯魚漁図解」上下は、2冊全体で後筆修正された箇所が二つのみで、「出雲石見魚漁図解」より草稿の完成度がはるかに高かった。収録された漁業は全体で58点、うち上は25点で海面の網漁業を中心に、下は33点で釣繩・雑漁業と内水面漁業をそれぞれ収録している。

4 むすびにかえて—研究課題と関連させて—

まず「水産図解」に関する研究成果を確認し、今後の研究課題を見ておきたい。

①鹿兒島県「甕海魚譜」関係では島津出版会編『「甕海魚譜」関係資料』（鹿兒島県立図書館出版、1978年）と上野益三著『薩摩博物学史』（つかさ書房、1982年）がある。前者は当時の雑誌・新聞記事などを収録した資料を収集、後者は「甕海魚譜」絵師、木脇啓四郎と二木直喜そして鹿兒島県令渡辺千秋の本資料の作成意図について言及している。⁵

②「福岡県漁業誌」については今津健治が解題（『福岡県史 近代史料編 農務誌・漁業誌附録 絵馬』福岡県、1982年）で福岡県の漁業調査と第1回水産博覧会への参加体制それに担当者（編者）田中慶介を解説している。

③「三重県水産図解・図説」関係では第1回水産博覧会に出品された「三重県水産図解」解題として中田四朗「目で見える三重県漁業史」（東海水産科学協会・海の博物館編『合冊 三重県水産図解』1984年）と第2回内国勸業博覧会に出品された「三重県水産図説」の解題として野村史隆「三重県の漁具と漁法」（東海水産科学協会・海の博物館編『印影 三重県水産図説』1985年）の他、中田四朗「明治一二年水産調査から『三重県水産図解』まで」（『海と人間』第22号、1994年）の再論ならびに「三重県水産図解」絵師を取り上げた井上善博「明治の物産画師 桜井金次郎」（『民具マンスリー』第24巻第2号、1991年）がある。

④長崎県「漁業誌料図解（南松浦郡）」関係では立平進「『五島列島漁業図解 明治十五年作成』解説」（『同上』長崎県漁業史研究会、1992年）がある。

その後、大田区立博物館が1995年6月に企画展「明治時代の水産絵図 明治の博覧会へ出品された水産業の絵図」（同年に図録刊行）を行ったが、それ以降は「水産図解」の復刻刊行や研究

がしばらく中断した。しかし近年では「兵庫県漁具図解」のようにデジタル画像とその研究成果がインターネット上で公開される例も見られる。また「地域学」の視点でとりあげた成果も見られる。⁶

さいごに「水産図解」への関心が一層、高まり、研究が活発となることを期待して2、3、研究課題を確認しておく。第一に漁業の近代化前の「水産知」として「水産図解」は断片的ではあるが、読み取れるのではないかといった点、第二に「水産図解」は漁具漁法と魚名について図解されているので、全国各地（海域・海流）さらに東アジア地域との比較研究を通して当時の漁業の歴史的な特質（多様性と地域個性）の解明といった点などが主な研究課題となろう。

なお、来春、同資料の翻刻と解題を付した形で出版を予定している。

注

- 1 農商務省水産局編纂『日本水産捕採誌』『日本水産製品誌』（明治42年刊）の復刻版の田辺悟「解説」（岩崎美術社、1983年、9頁）には「明治十年代の漁業社会は不漁にあえいでいた。たとえば、神奈川県三浦三崎における明治十六～七年ころの戸長役場書類には、『明治十一年以来の深刻な不漁の原因を・・・魚の餌となる稚魚を乱獲したり、魚群を追い散らしたりする害をあげ、それ等を<苛酷漁具>とよんで大きく取りあげ、その取締りを県へ度々陳情した』』としている。なお、引用文献は内海延吉編著『沿岸漁業九十年誌』三崎沿岸漁業協同組合連合会、1961年、41頁）である。
- 2 杉本隆成、黒田一紀、坪井守夫「資源変動の歴史的変遷－古文書と堆積物コアーに基づく海洋環境と生物生産の推定－」（『海洋』第422号、2005年）
- 3 「島根県管内漁具類集図」は第5区第4類に、「島根県管内農具類集図」は第5区第9類にそれぞれ出品された。
- 4 井上善博「明治の博覧会と水産誌編纂事業」（『明治時代の水産絵図 明治の博覧会へ出品された水産業の絵図』大田区立郷土博物館、1995年）
- 5 近年では安達晃一・加治屋貞之共編『薩摩藩文化官僚の幕末・明治 木脇啓四郎「萬留」－翻刻と注釈－』（岩田書院、2005年）がある。
- 6 田和正孝「兵庫県漁具図解から見えてくるもの」（関西学院大学学術資料講演会2009年11月）、平賀大蔵「『三重県水産図解』にみる熊野灘の漁業」（『熊野灘 磯の辺路紀行－みえ熊野の歴史と文化シリーズ⑤』みえ熊野学研究会、2005年）。